

ドル/円相場のトレード戦略

■ 中長期展望

注目されていた英国の国民投票の結果は、大方の予想を裏切る EU 離脱となりました。ドル/円相場は直近の安値103円55銭をあっさり割り込み、2013年11月以来の100円割れとなり、一時99円ちょうどの安値まで下落しました。

【ドル/円 週足】



英国の EU 離脱は世界経済の先行き不透明感を強め、また米国の早期利上げを妨げるものと捉えられており、中期的にドル/円は円安に大きく戻る見通しはとて描けず、95円割れをもイメージする必要が出てきました。

95円水準は、2011年の安値から2015年の高値の61.8%戻しとなっており、当面のドル/円の下値の目処となります。

しかし、52週移動平均との乖離で見ると、6月24日につけた99円では約15%の下方乖離となり、リーマンショックを受けドルが下落した2008年の下方乖離とほぼ同じ水準になりことから、過度な下がり過ぎの反動での短期的なドルの戻りも期待され、また日本のリコプターマネー政策への思惑が円の上値を抑える要因となっていることから、100円～110円のレンジ相場の継続が意識されてきました。

ただし、8月に入ってからのドルの戻りは非常に鈍く、上値の重さが際立ってきており、年末に向けてのドル安リスクが高まってきていることには注意が必要であり、日米に金融政策の行方を見極めたいところです。

ドル/円相場のトレード戦略

■ 短期展望

先週は、日米の金融政策決定会合を控えて模様眺めムードが強まり、両国の金融政策への思惑に振らされながらも102円台を中心とした方向感のない小動きが続きました。

今週は、いよいよ20-21日に日本銀行金融政策決定会合と米連邦公開市場委員会（FOMC）が開催されます。市場のコンセンサスは、FOMCは現状維持、日銀は追加金融緩和の実施（マイナス金利の深掘り）となっています。

そのため、コンセンサスとは違った結果となった場合には大きな波乱が起きる可能性があり要注意でしょう。

ただし、波乱が起きた場合でも影響は短期的なものとなり、持続的な円高は回避できるものと考えられることから、100円～104円のレンジのなかでイベントをこなしていく動きを想定します。